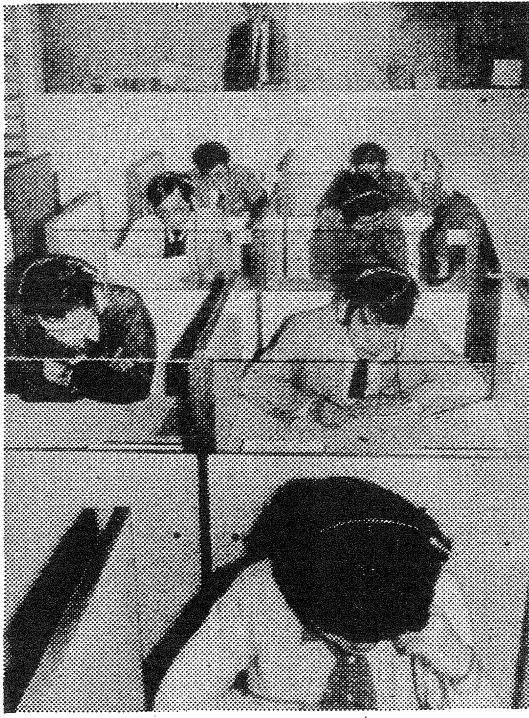


なぜ？ 英語が話せないの

「英会話のできる先生」の養成を目指し、毎週金曜日に県教育センター（粕屋郡篠栗町）で開かれている「断続研修」の内容は、極めてバラエティーに富んでいる。

まず、午前九時半から約三十分間は、英語スピーチの時間。先生たちは話題を自由に選んで各人が二、三分間しゃべらされる。表現に問題があれば、英語指導主事助手のステイブ・ロングさん（ニミ）米國コネチカット州が注意する。日本人が最も苦手とする「人前で英語を話す」自信を植えつける。

次の十分間は、ゲームを通じて発音器官（舌、口唇など）の訓練。英語の発音、その奥にある風俗や習慣についても併せて学ぶ。このあと半時間、LLを利活用しての書き取り実習があり、日本人にとって聴き取り困難



ヒアリングの特訓を受ける先生たち
(県教育センターで)

<13>

中垣實和子・小郡中教諭（左）は「暗記する文例、宿題に加えの実践会話などで、最初は午前中だけでも音を上げそうだった」と語る。が、午後の部はさらに厳しい。

難な弱音、連音などの聴取訓練練習」が始まり、ロング先生が個別に発音を矯正。三十分間、ここで五分間の休憩後、再びLLでのヒアリング・スピーキ中、最後の講義「現代英語の表現に関する理解を深める」コ

午後、まず、先生たちを待ち受けているのが「会話交流の時間」（三十分間）。NHKラジオ英会話教材を使って、実践に当たっては「感情をこめ、表情は英語のリズムをつかむ。続い

えは、病院での会話では、腹筋「理解力の時間」。そのあと、読み、書き訓練のための「リーディング・ライティングの時間」が各三十分ずつ。このあと、四十分間は自分の考えを話すスピーチと、英語の指導法の実習。最後に英語でその日の感想などを話して一日が終わる。

この断続研修は、一年間（三十五日間）行われ、北九州、福岡、筑後、筑豊四地区の英語教師二十人はビッシリ詰まった集中講義に付き合われる。余程の熱意がないと途中で脱落してしまうが、真崎良幸・久留米大学付設高校教諭（左）や宮井路・三池高校教諭（中）らは「厳しい勉強だけに、効果は大きい」と、口をそろえる。

文部省が英、米人による英語指導主事 助手制度を始めて十年。県下では既に二百二十人の教は県下の英語教師数（中学校千人、公立高校六百七十八人）に比べ、まだ一割に満たない。

断続研修の特訓 内容に富み大きい効果